

## 追跡アンケート調査（抜粋）

### (1) 調査対象

- ア 平成27年度に但馬やまびこの郷の宿泊体験活動をした小学生及び中学生の在籍校の教職員
- イ 平成27年度に但馬やまびこの郷の宿泊体験活動をした児童生徒の保護者

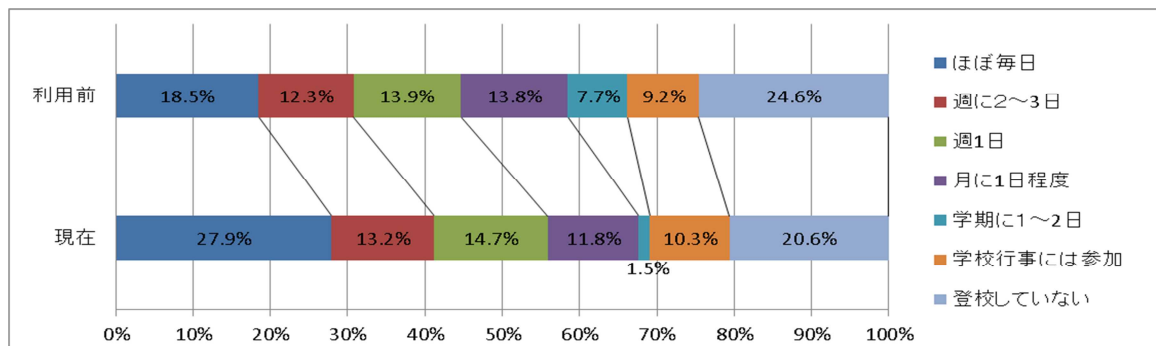
### (2) 調査時期

平成28年6月～8月

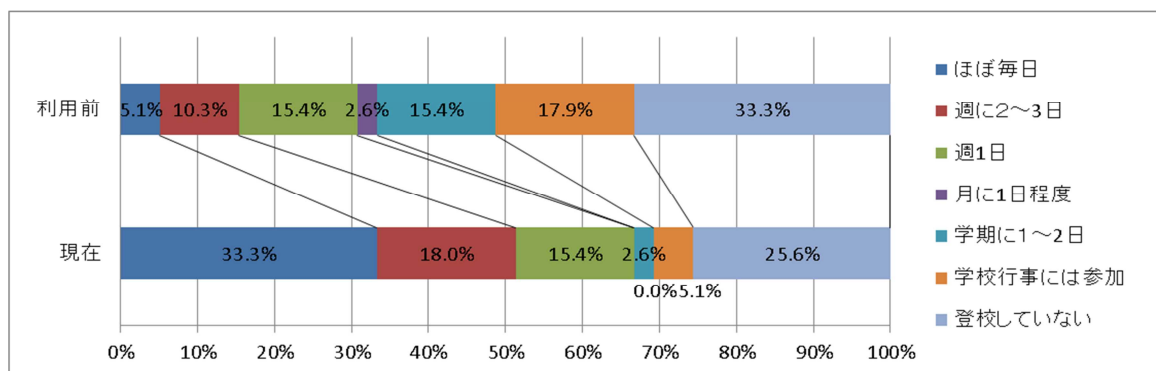
### (3) 調査結果

#### ア 登校状況について

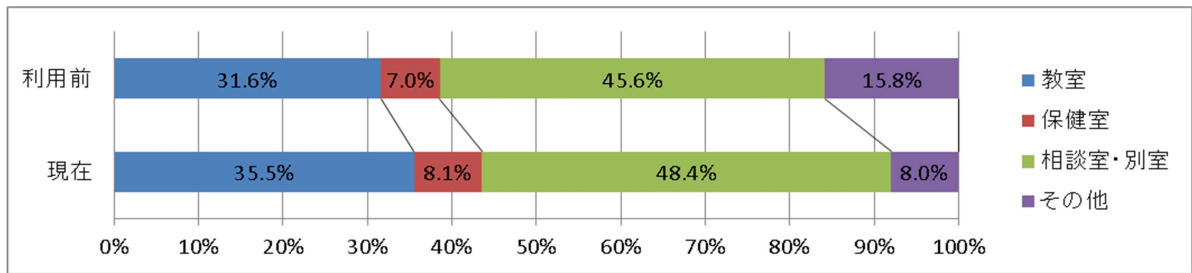
登校状況については、利用前においては、ほぼ毎日登校している割合が、学校用アンケートでは18.5%〈図1〉、保護者用アンケートでは5.1%〈図2〉であったのに対して、利用後においては、学校用アンケートでは27.9%と増加し、保護者用についても、33.3%と増加している。登校後の主な居場所については、相談室・別室の割合が2.8%増加し〈図3〉、登校している時間帯については、およそ1日中の割合が4.5%増加している。〈図4〉。これらの結果から、多くの児童生徒が当所の利用後に段階的に学校復帰に向けて動き始めていること、また本人の状態に応じて居場所や登校時間を多様化させることで登校しやすい状況になっていることが分かる。



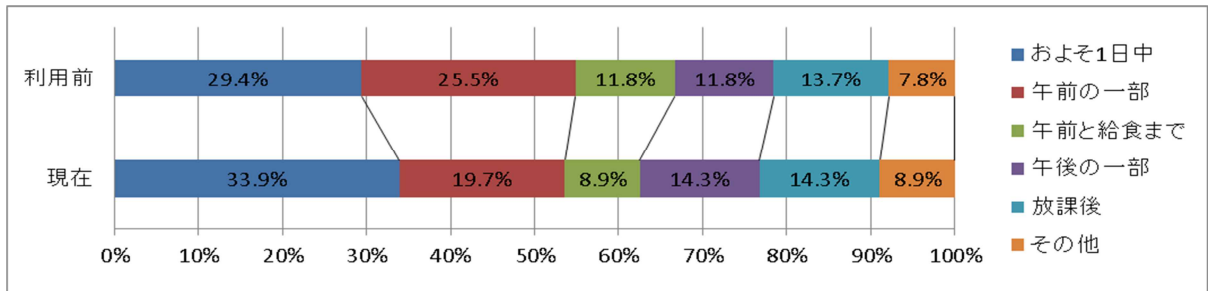
〔図1〕 登校状況（学校用）



〔図2〕 登校状況（保護者用）



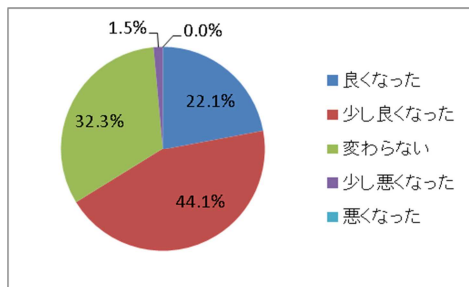
[図3] 登校後の主な居場所（学校用）



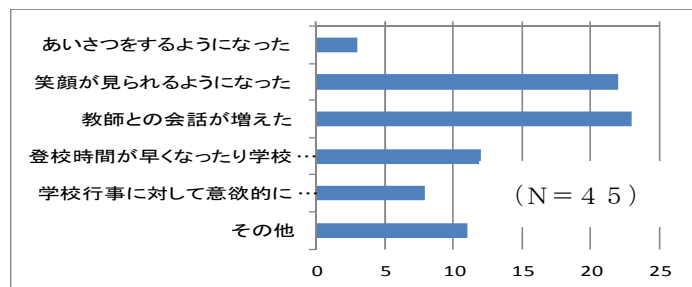
[図4] 登校している時間帯（学校用）

### イ 生活の様子について

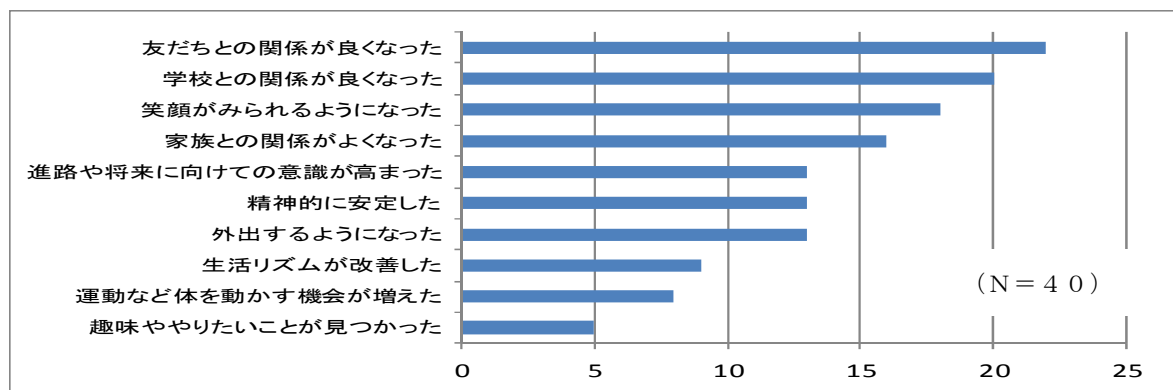
学校生活の変化では「良くなった」「少し良くなった」を合わせた割合が学校では66.2%と高い（図5）。特に教師との会話が増えたり、笑顔が見られるようになったりといった対人関係に改善が見られる（図6）。家庭においても様々な改善が見られる。当所利用により友だち、学校、家族ともに関係が良くなり、笑顔が見られるようになった児童生徒が多いことが分かる（図7）。その結果として、精神的に安定し、外出したり進路や将来へ向けて意識が高まったりしたことは生活改善につながる要素だと考える。



[図5] 学校での生活の変化（学校用）



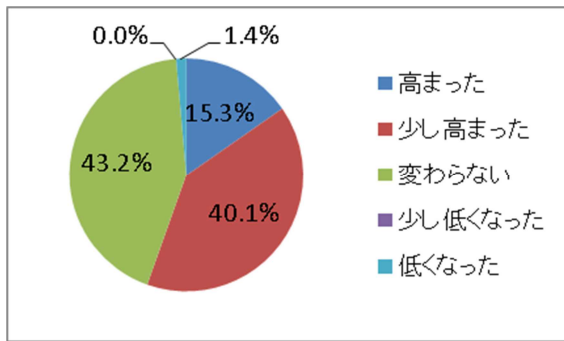
[図6] 学校での改善内容（学校用）



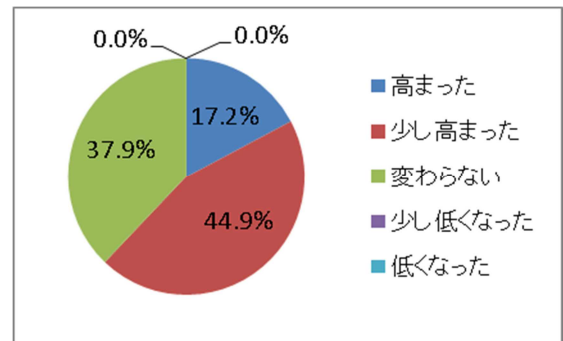
[図7] 利用後の家庭での変化（保護者用）

### ウ 学習意欲について

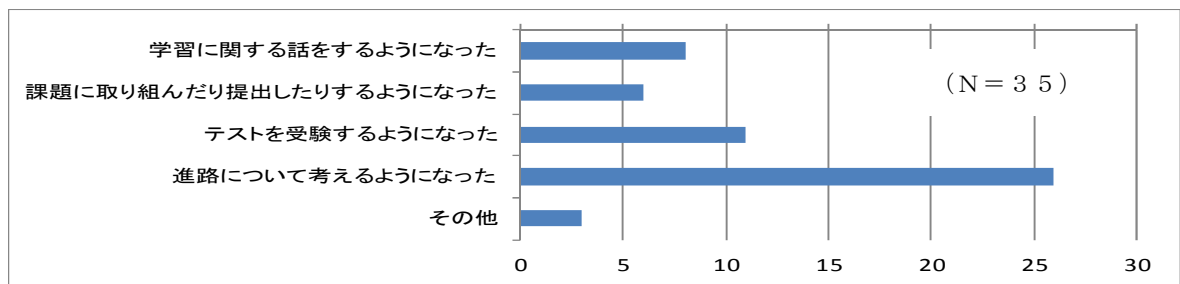
学習意欲については、「高まった」と「少し高まった」を合わせた割合が学校用では55.4%〈図 8-1〉、保護者用では62.1%〈図 9-1〉に上る。一昨年度は学校用アンケートで「変わらない」と回答した割合が圧倒的に多かったが、平成 26 年度から導入したやまびこプリント（算・数、英）の効果があるものと考えられる。自分の学習進度に合わせてプリントを選ぶことができるため、少しずつ学習に前向きに取り組めるようになっていったと考えられる。具体的な変化では、学校・保護者ともにテスト受験と進路に対する意識高揚の回答が多い。また、家庭では「机に向かうようになった」の回答も多く、気持ちが少しずつ学習に向き始めた様子が伺える。〈図 8-2、図 9-2〉



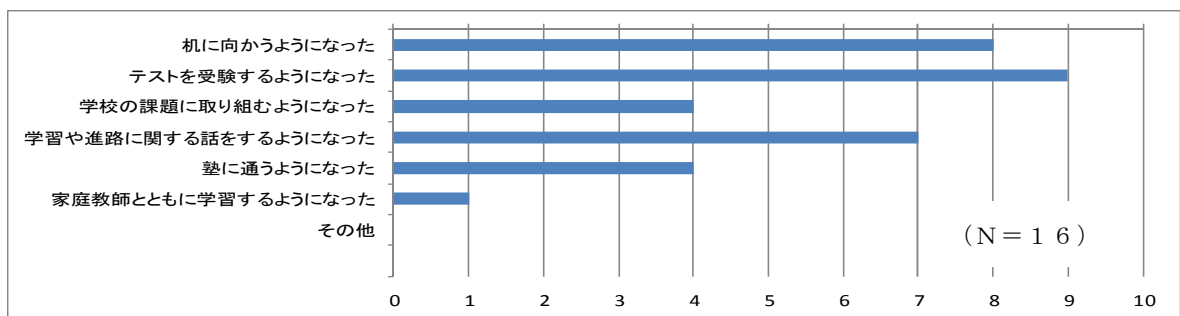
〔図 8-1〕 学習意欲（学校用）



〔図 9-1〕 学習意欲（保護者用）



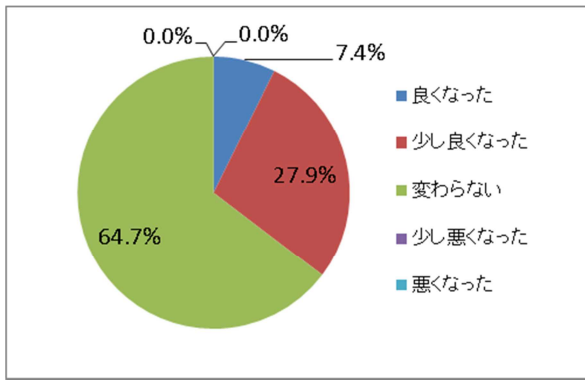
〔図 8-2〕 高まった内容（学校用）



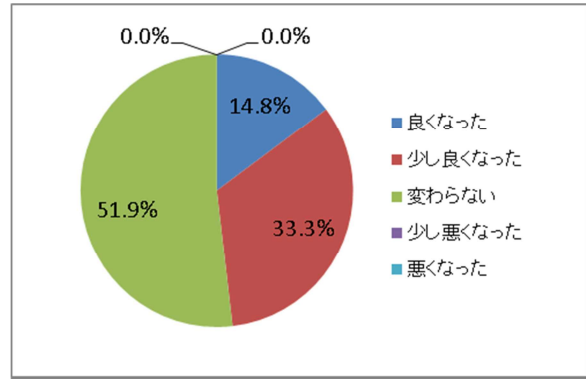
〔図 9-2〕 高まった内容（保護者用）

### エ 人間関係について

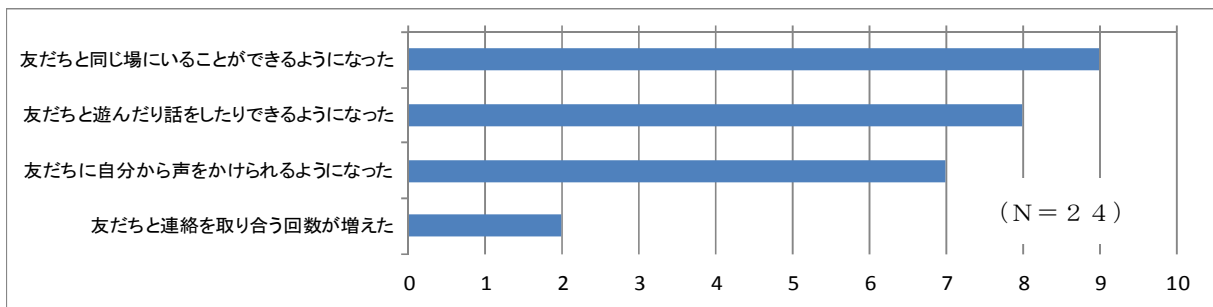
友だち関係の変化については、学校用では「変わらない」と回答した割合が、64.7%〈図 10-1〉と高いが、保護者用では肯定的な回答をした割合が48.1%〈図 11-1〉と半数近い。母数の差はあるが、当所利用の児童生徒とつながったことが要因ではないかと考えられる。「どのように良くなったか」の問いに対して、学校、保護者ともに「友だちと同じ場にいることができる」「友だちと遊んだり話をしたりできる」が多い。〈図 10-2、図 11-2〉



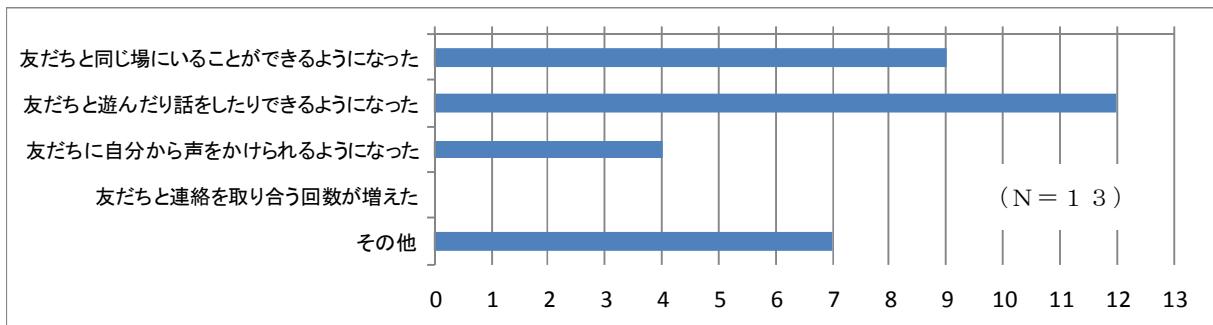
[図 10-1] 友だちとの関係（学校用）



[図 11-1] 友だちとの関係（保護者用）

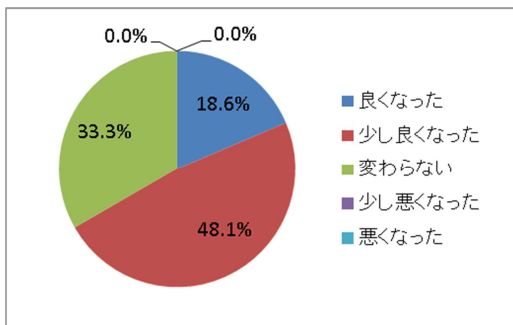


[図 10-2] 良くなった内容（学校用）

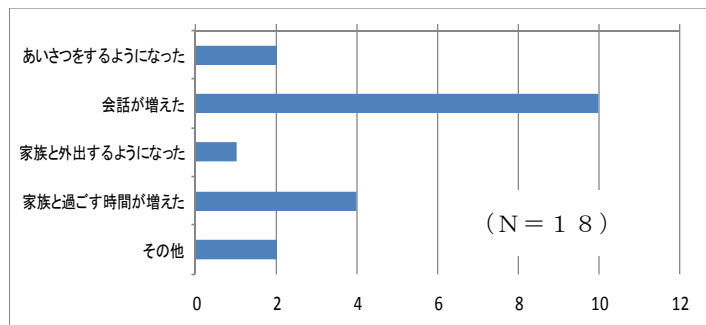


[図 11-2] 良くなった内容（保護者用）

家族関係の変化については、肯定的な回答の割合が 66.7%と〈図 12-1〉半数以上の家庭に改善が見られる。「会話が増えた」が最も多く、当所での仲間やスタッフとの生活が人間関係の広がりをもたらすとともに、家族と離れて生活することで子どもも保護者もお互いの関係を見つめ直す機会になったと考えられる。〈図 12-2〉

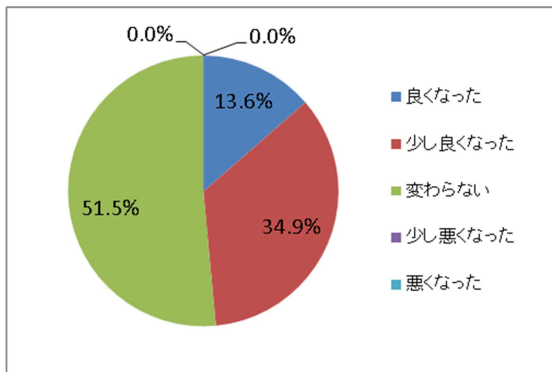


[図 12-1] 家族との関係（保護者用）

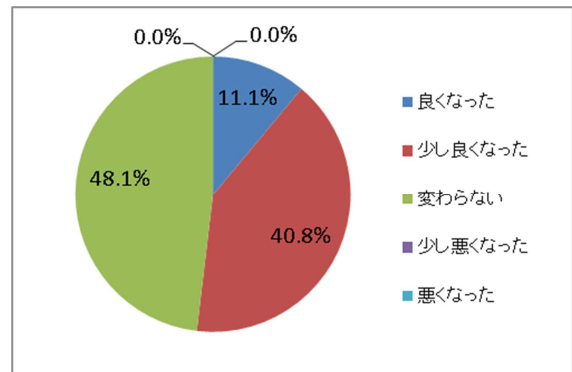


[図 12-2] 良くなった内容（保護者用）

学校と家庭との関係の変化においては、肯定的な回答の割合が、学校用では48.5%（図13）、保護者では51.9%（図14）と、学校より保護者の方が変化をやや強く感じている。学校からの働きかけに対する子どもの小さな変化を、家族の方が敏感に感じ取ることができていることが伺える。



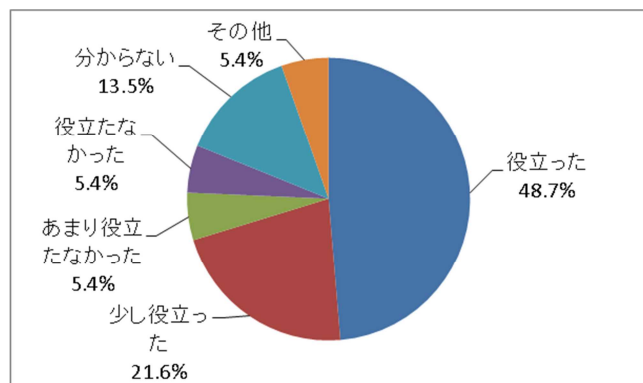
〔図13〕学校と家庭の関係（学校用）



〔図14〕学校と家庭の関係（保護者用）

#### オ 当所の利用の有効性について

「当所の利用が不登校の改善に役立った」（少し役立ったを含む）と回答している割合が、70.3%（図15）と高い割合であった。学校復帰に向けての橋渡しとして、当所の果たす役割は大きいことが伺える。



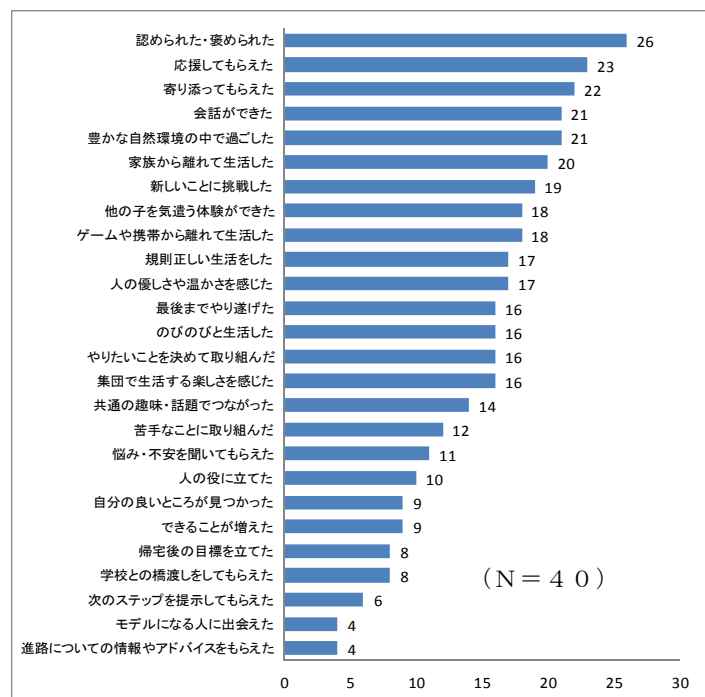
〔図15〕当所の利用の有効性（保護者用）

#### カ 効果的なかかわりについて

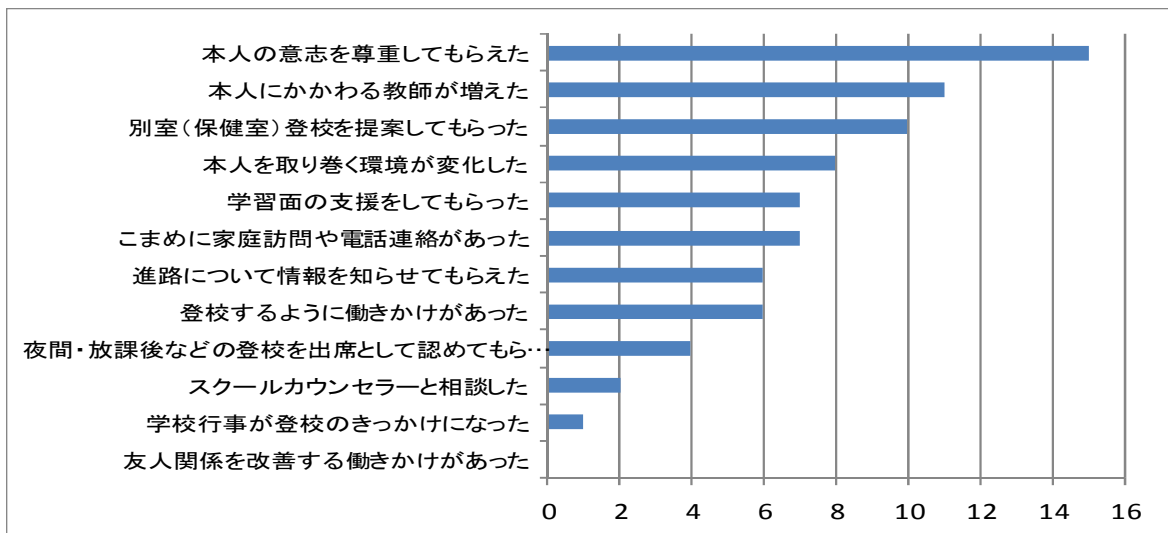
当所・学校・家庭それぞれにおいて、子どもたちに対する効果的なかかわりについて調査した。

まず当所のかかわりについて「認められた・褒められた」「応援してもらえた」等の他者からの肯定的な評価が上位にきている。スタッフやメンタルフレンドとのつながりや集団での宿泊生活により、自己肯定感や自信の回復につながったことが効果として大きいと考えられる。

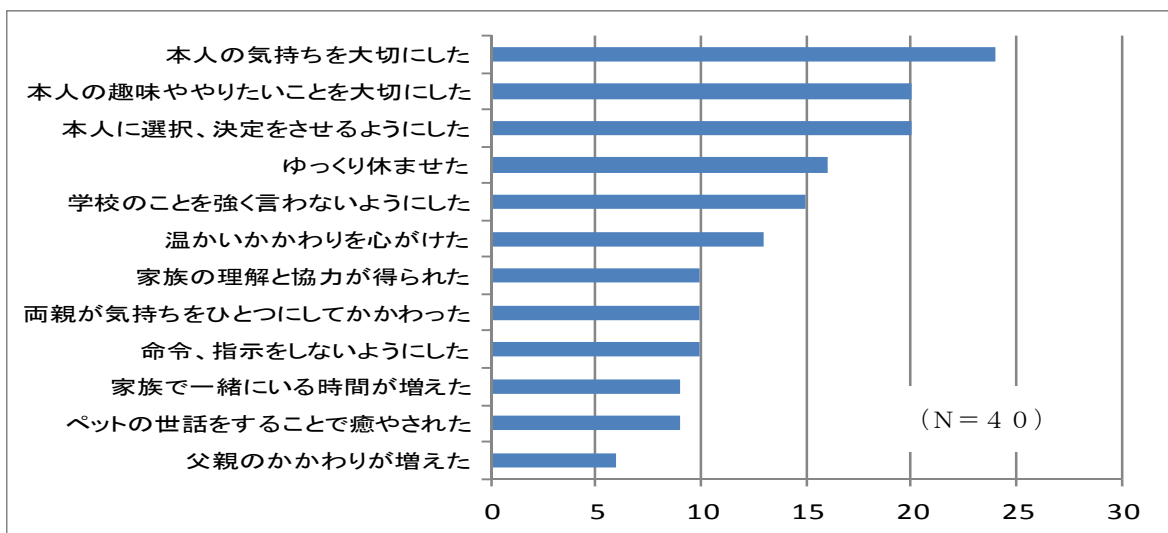
「ゲームや携帯から離れて生活した」の項目に効果があったと考えられる方が半数近くあり、不登校の子どもたちの日常にメディア依存が大きな影響を及ぼしていることを示唆するものである。



〔図16〕効果的で会った当所のかかわり（保護者用）



[図 17] 効果的であった学校のかかわり (保護者用)



[図 18] 効果的であった家族のかかわり (保護者用)

次に学校からの効果的なかかわりとしては、「本人の意思を尊重する」「本人にかかわる教師が増える」ことが、重要であると再認識できる結果となった。別室(保健室)登校と、夜間・放課後登校の項目を分けたが、合わせると2番目に多い項目となり、学校における居場所作りも重要であると言える。また、本人の意思を尊重する内容が上位にきている。  
 〈図 17〉

家庭においては、「本人の気持ちを大切にされた」「本人の趣味ややりたいことを大切にされた」「本人に選択、決定をさせるようにされた」など、本人の意思を尊重し自己選択・自己決定させることの大切さが改めて確認できる結果となった。また、「ゆっくり休ませられた」「学校のことを強く言わないようにされた」など、本人の気持ちに寄り添いながら待つ姿勢が効果的であったことが伺える。家族は、その子と一緒に過ごす時間が長いいため、待つ姿勢でいることはなかなか難しいが、そのようなかかわり方により親子間の葛藤が軽減され効果的であることが伺える。  
 〈図 18〉